

資料

我國における哲學古典の翻譯の
現況について

近來皇道主義の擡頭ないし國學的思想の復興に伴つて、日本哲學の樹立の必要が叫ばれ、その反動としてヨーロッパからの哲學の輸入時代はすでに終つたかの言を爲す者がある。我國固有の思想を顯揚することは洵に結構であるが、その理由からして哲學も他の重要物資と同様、自給自足の域に達したと考へるのは行き過ぎである。我國においては西洋哲學は今にして漸く根源的に理解されはじめたに過ぎない、と私は考へる。かゝる見解に對して一つの資料を提供するために、現在ヨーロッパの哲學古典が如何なる仕方と程度とにおいて邦語に移されてゐるかを報告してみよう。(古典は最も廣義に解すればデイルタイ、コーヘン、ベルグソンなど現代の哲學者に屬するものをも含むうるであらうし、またこの言葉の傳統的用法に従へば、主としてギリシヤ・ローマの哲學を指稱することになるであらうが、茲には便宜上ヘーゲルまでの代表的な哲學者を取り上げ、その

主要なる著作に觸れることにしたい。)

我國における哲學古典の翻譯史上最も輝かしい業績として、我々は十六年の歳月を経て昭和十四年の春完成した「カント著作集」十八卷(岩波版)——三「批判」「宗教哲學」「プロレゴメナ」「道德哲學原論」「道德哲學」「法律哲學」「論理學」「自然哲學原論」「可感界並に可想界の形式と原理」「一般歴史考」「神の存在の證明根據」「人間學」「教育學」「書簡集」其他——の刊行をまづ特記しなくてはならない。カントの主要なる著作の殆んど凡てを含むかゝる譯業は、筆者の知る限りでは、英佛、伊など諸外國においても未だ試みられてゐない。フイヒテについては「全知識學の基礎」「知識學への第一序論」「第二序論」「知識學の新叙述の試み」「知識學の概念」(以上岩波版)、「學徒の使命」(弘文堂版)、「ドイツ國民に告ぐ」「人間の使命」「淨福なる生への指教」(以上岩波文庫版)、「道德論」(第一書房版)、「封鎖商業國家論」(弘文堂版)を擧げることができる。これらは大體においてフイヒテの著名なる著作を網羅したものと云つてよいであらう。シェリングについては「哲學と宗教」

「人間的自由の本質」(以上岩波版)、「先驗的觀念論」(古今書院)、「學術研究の方法論」(理想社版)が存するのみであるが、ヘーゲルについては最近の「ヘーゲル復興」の聲に唱和して多くの翻譯が試みられ、とくに「ヘーゲル著作集」(二十二卷(岩波版)の刊行の企圖はその代表的なものである。その中現在までに「哲學體系」二卷、「精神現象學」上・中二卷、「大論理學」上・中二卷、「歴史哲學」「哲學史」上巻がそれぞれ上梓されてゐる。なほそれに既存のものとして「哲學概論」(岩波版)、「法律哲學綱要」(改造文庫版)、「宗教哲學」(モナス版)、「哲學史」(鐵塔書院版)、「書簡集」(河出書房版)等が加へらるべきであらう。以上の瞥見からも明かであるやうに、カント及び彼以後の所謂「ドイツ觀念論」を代表する三巨匠の著作の翻譯は總じて満足すべき状態にあるといふことができる。

さらに「デカルト選集」六卷(創元社版)が近く完成を見ようとしてゐるのは、哲學古典の移植に大いなる歩武を進めたものと言へるであらう。この選集は書簡集を除けば大體ブヘナウの獨譯「デカルト著作集」とその内容を等しくし、現在刊行されてゐるのは「方法敍説」「精神指導の規則」「哲學の原理」「情念論」「眞理の探究」「書簡」上巻である。(また我々はそれにデカルトとともに十七世紀のフランス思想を飾るパスカルの主

要なる著作、即ち「冥想錄」「小品集」「田舎の友への手紙」(以上白水社版)が相繼いで邦譯されたことを附言しておいてもよいであらう。)スピノザについては「哲學體系」(倫理學)、「知性改善論」(以上岩波文庫版)があり、なほ「スピノザ全集」の既刊本(二卷)の中には以上の外に、「短論文」「デカルトの哲學原理」が含まれてゐる。ライブニッツについては「形而上學敍説」「單子論」「ライブニッツ・アルノー往復書簡」等(以上岩波版)を舉げることができる。

近世哲學におけるカント以前の形而上學を代表するこれら大陸の體系的著作の翻譯状況に比して、英國の經驗論は我國にあつては著しく閑却せられ、それについてはロックの「人間悟性論」(岩波文庫版)、バークレーの「人知の原理に關する論文」及び「ハイルスとフィロノウスとの三つの對話」(以上大村版)、ヒュームの「人生論」(岩波文庫版)が見出されるに過ぎない。こゝにも我國における西洋哲學の理解の一面性が覗はれる。

我々は中世哲學を措いて、言葉の本來の意味における古典としてのギリシヤ哲學に遡らう。そして茲でも我々の報告をプラトン、アリストテレス、プロチノスの三大體系家に限らう。これら三巨匠の中プラトンについては夙にその邦譯が試みられ、「プラトン全集」(富山房)の名の下に流布したものも存在す

一 橋論叢 第八卷 第五號

るが、それは今日の學問的水準を以てしては全くその名に値しない。それを除いて現在刊行されてゐる翻譯は次の通りである。「ソクラテスの辯明」「クリトン」「プロタゴラス」(以上岩波文庫版)、「カルミデス」「ゴルギアス」「メノン」「イオン」(以上第一書房版)、「バイドン」「饗宴」「テアイテトス」「ソピステス」「ピレポス」(以上岩波版)。しかしこれらの大半はプラトンの初期の對話篇であつて、彼の最大傑作たる「ポリテイア」(理想國)或ひは「ノモイ」(法律)等は譯出されてゐない。(尤もこれらの翻譯と稱するものが存在しないわけではないが。)アリストテレスについては、プラトンに比してさらに著しく閑却され、その翻譯が要望されるに至つたのは最近のことと屬する。そしてそれに應じて「アリストテレス著作集」二十三卷(河出書房版)の刊行が約束されたけれども、既刊のものには「心理學」二卷、「ニコマコス倫理學」「經濟學」「アテナイの國制」のみで、彼の主著は概ね譯出されてゐない。なほそれに「詩學」「國家學」(第一書房版)を加へることが出来る。さらにプロチノスに至つては、彼の全著作たる「エネアデス」の翻譯は全く存在しない。ギリシャの他の哲學者については推して知るべしである。

もしかゝる哲學古典の翻譯狀況が我が哲學界の動向を示唆し

てゐると言ひうるならば、我々は如上の簡単な報告からして、およそ次のやうな結論を導き出すことができるであらう。我國における西洋哲學の輸入は主としてドイツ哲學を中心に行はれ、そしてその理解は汎く近世哲學——就中大陸の哲學——に及んでゐるけれども、ヨーロッパ諸國において繰返へし新しく翻譯せられ、その學問的生命の源泉として高く評價されてゐるところのギリシャ哲學は、從來我國においては専門家の好事的學問として不當に敬遠せられ、その研究と翻譯とが眞面目に取り上げられるに至つたのは最近のことである。そしてそれとともに西洋哲學もその素性が明かにせられ、源泉からの理解が可能となつたといはねばならぬ。この意味において西洋哲學の輸入時代はすでに終つたのでは決してなくて、本質的には未だその緒についたばかりなのである。

附記 一、以上の報告には抄譯は凡て省略した。

二、二種以上の翻譯のあるものは簡明を期するためその孰れか一種を取り上げた。

三、「世界大思想全集」(春秋社版)の中に含まれてゐる翻譯は凡て除外した。若干の例外はあるにしても一般に學術書の翻譯として周到な用意を以てなされたものとは認め難いからである。(藤井義夫)